

## Revisiting the J-Curve for Japan

成蹊大学 大野正智

早稲田大学 朴相俊

本論文は、日本の貿易収支において **J/S** カーブ現象がどのように出現するかを検証した。そこで、貿易収支と交易条件の関係について、相互相関係数、インパルス応答関数、グレンジャーの因果関係テストを利用し、**J/S** カーブが、1980**Q1** から 2008**Q3** までの間にどのように観測されるか観察した。この約 30 年間に、**J/S** カーブの形状が構造的に変化していることが、日本をとりまく国際環境の変化とともに考えられ、本論文では、**VAR** の安定性テストでその構造変化の可能性を検証した。このテスト結果によると、この 30 年のデータ期間は、3 つのサブ期間((1)1980**Q1**~1986**Q2**、(2)1986**Q3**~2000**Q2**、(3)2000**Q3**~2008**Q3**)に分けられた。そして、それぞれのサブ期間で、対全世界との貿易に関する **J/S** カーブ、及び、米国、中国、韓国に対する日本とのそれぞれの二国間貿易での **J/S** カーブの分析を行った。結果は、対全世界貿易での **J/S** カーブ現象が 2 番目と 3 番目のサブ期間で出現しているのが判明した。そして、2 番目のサブ期間の主な **J/S** カーブの貢献が対米貿易であったのに対し、3 番目のサブ期間では対中貿易が主要な貢献要因になっていることが明らかになった。